

## 自然環境と「心の応答」 Ⅱ

○福 島 巖                      宮原英種                      宮原和子  
 (長崎県八斗木保育園)    (第一福祉大学)            (第一福祉大学)

日常の保育において、子どもが接する自然環境にはさまざまな事象があり、子どもはそれらの事象と遭遇したときに受ける発見の喜びや自然がもつ神秘性などに興味をもち、次々とさらなる探索活動や遊びへと発展させていく。このような場面において、保育者が応答的保育の「心の応答」を働かせ、子どもの気持ちに共感し、感動した気持ちを共有し、ことばや態度で示すことによって、子どもは保育者を信頼し、安心して自発的に探索活動や動植物などの観察活動をおこなうのである。

したがって、保育者が子どもに自然環境と接する機会を与え、応答的保育の「心の応答」を働かせ対応することは、子どもの発達にとって大切である。

本研究は、保育園の園庭に存在する自然環境における子どもの探索活動に保育者が対応する場面を記録・分析し、自然環境と「心の応答」について考察することを目的とするものである。

### 方 法

対象：保育者1名、3歳児男児1名、女児1名、5歳児女児1名。園庭で探索活動をおこなっている場面で小型ワイヤレスマイクを使用しカセットテープに記録した。

### 結果・考察

表1は、保育者と3歳児のH子、T男が園庭で探索活動をおこない偶然くもの巣を発見し、くもを探している場面である。

この場面ではまず、H子がくもの巣を発見し、「くもの巣」という。それに対して保育者が「くもの巣、あつくもの巣だ」「ほんと」【感情移入】とH子の発見した喜びに共感する動作とことばで受容している。この保育者の「くもの巣、あつくもの巣だ。ほんとう」ということばは「心の応答」によって保育者の深層にある「共感」の心をくみとり、それを感情移入の行動とともにことばで表現したものである。このことが側にいたT男の関

心へとつながり、ここで、T男が「何」と発話し、それに対して保育者は「くもの巣だって」という【説明】へと発展している。さらにくもを発見したH子は、「くもがいるばい」と期待した様子で発話する。それに対して保育者は「くもがいるかなあ」とさらに発問し期待の気持ちを表現し、さらに探索を進めるうちにくもらしい虫を発見した保育者が「あっ、ほんとだねえ」と【感情移入】で応答している。

表1 園庭の探索活動(くもの巣発見)の場面

保育者の発話	子どもの発話
くもの巣、あつくもの巣だ。ほんと	← H子：くもの巣
【感情移入】	→
くもの巣だって	← T男：何
【説明】	→ H子：くもがいるばい
くもがいるかなあ	←
【Yes・No 質問】	→
(保育者、H子、T男がくもを探しているうちにくもらしい動くものを発見)	
あっ、ほんとだねえ	
【感情移入】	→

表2は、園庭で発見した毛虫を透明のプリンの空き容器に入れH子が観察をさらに深めている場面である。

この場面ではまず、毛虫を観察しているH子が「あっさっき動いた」と発話したのに対し、保育者は「動いたね」【確認】と答えている。そして、H子の「めめがあるよ、白いの」に対しては「へえ、めめが」と【感情移入】で応えている。それから「どっちが目かな」と【Wh 質問】をおこな

いH子の観察がさらに深まる発話をしている。その後H子の「ここさ」という発話に対して「すごいねHちゃんよく見たね」と【賞賛】し受容している。この賞賛は子どもの観察力に「心の応答」を働かせてことばで表現したものである。

表2 園庭の探索活動（毛虫の観察）の場面

保育者の発話	子どもの発話
動いたね	H子：あっさっき動いた
【確認】	H子：めめがあるよ、白いの
へえ、めめが	
【感情移入】	H子：ここさ
どっちが目かな	
【Wh質問】	
すごいねHちゃん	
よく見たね	
【賞賛】	

表3は、園庭の探索活動で砂場で貝殻を発見したら歳児のM子に保育者が対応している場面である。

この場面で最初にM子が「先生ほら」と発話したのに対し「あら、貝殻ね」と【明瞭化】し、さらに「どこで見つけたの」と【Wh質問】で会話を発展させている。そして、M子が「お砂場」とこたえたのに対し、保育者は「お砂場にあったの」と【確認】している。ここでM子が嬉しそうな表情で「うん」と発話したので、保育者は「ほんと、よく見つけたね」【感情移入】【賞賛】と貝殻を発見したM子の喜びに共感している気持ちを「心の応答」によりくみあげたことばと表情によって対応している。そして、M子の「ほらこれピカピカの」に対し、保育者は貝殻を手にとり「ピカピカしてるね」と【確認】し、さらに「きれいね」【感情移入】と「心の応答」で対応している。そして、保育者が「まだあるかな?」【Yes-No質問】と発話し、これに対しM子は「うんあった」といって走って砂場に貝殻を探しに行くという行動をおこしている。

この場面においても保育者はM子の貝殻の発見

やその美しさを感じた喜びに対し、「心の応答」の働きにより共感的理解の気持ちをくみあげ対応している。その結果、M子がさらに貝殻を探しに行くという行動に発展している。

表3 園庭の探索活動（貝殻の発見）の場面

保育者の発話	子どもの発話
あら、貝殻ね	M子：先生ほら
【明瞭化】	
どこで見つけたの?	
【Wh質問】	M子：お砂場
お砂場にあったの	
【確認】	M子：うん
ほんと、よく見つけたね	
【感情移入】【賞賛】	M子：ほら、これピカピカの
ピカピカしてるね	
【確認】	
きれいね	
【感情移入】	
まだあるかな?	
【Yes-No質問】	M子：うんあった

(M子は走って砂場に貝殻を探しに行く)

このように、子どもの自然環境での探索活動において、保育者が「心の応答」を働かせ子どもの心に対して共感的理解や共感的心情をもって対応していくことで、子どもはもっと見てみようという新奇なものへのかかわりを持ち、意欲的に観察や認識を深めていく。さらに保育者との信頼関係をうまく獲得することにもつながっていくと考えられる。したがって、保育者は子どもが自然環境と接する場面で応答的保育の「心の応答」をはたらかせ対応していくことが大切であるといえるであろう。

参考文献：「応答的保育の研究」(宮原・宮原)2002